

随想

タイ国王「ラーマ9世」との出会い

梶本 邦夫

私が政府特使の一員としてタイ王国を訪問したのは今から40年前の事である。バンコック郊外にあるアジア大学（オーストラリア政府、日本政府等が主体となり開学）近くに、日本の中小企業とタイの企業が共同出資し、企業団地を建設し、7年後に全てをタイ企業に移管し、タイの経済基盤、特に開発途上にあったタイとタイ企業に対し、日本の中小企業固有の技術の移転を図ろうという日本政府の政策を実行するためであった。

この政策実施にあたり、タイ政府のはからいでタイ国王と儀礼的会見がはかられた。お会いしたタイ国王ラーマ9世は、1927年生まれと言うことで、現在は80歳を超えておられるが当時はお若く、落ち着いた国王だという印象を強く持った。国王のフルネームは、プミボンアドンラヤデートといわれるが、しばしば我々日本人は余りにも長いお名前なので簡略化し、勝手にプミボン国王と言うことが多いが、タイの人々には意味不明の言い方だということである。

さて、私達が王宮を訪問し、政府特使の一員としてお目にかかった時、国王は40歳を少し越えたお年だったが、若々しく、メガネをかけておられ、国王の部屋にわが国の政府職員とタイ政府通産省（正式部署名は異なるが）の大臣および政府職員が入った時、国王は気軽に手まねきされ、我々日本政府職員に近くに来よう促された。同時に入ったタイ政府職員は、通訳を除き全員床にひれ伏した。私はびっくりし、どうすればいいのか躊躇した。一般的には国王がタイ政府職員やタイの一般人と会見される場合は、このように行われるという事を後ほど知らされたが、驚いたのは確かである。当然、世界に160カ国以上あるといわれる王国（日本なども含め）では、それぞれ独自の文化があり、元首である国王のとの会見には独自の様式があることは容易に理解できる。権威、地位の高さから来るものであることは当然である

が、タイ国民の国王に対する深い尊敬の表現であり、日本では味わえない光景に畏敬の念を持った。

国王はアメリカマサチューセッツ州のお生まれで、流暢な英語で歓迎の短い言葉を述べられ、手を差し伸べられたが、国王との握手は固く禁じられていたので全員一礼した。私は生まれて初めて国王と呼ばれる方に身近でお目にかかり、若かった私はその晩中々眠りにつけなかったことをおぼえている。

私は、この時大阪府立産業能率研究所の主任研究員で、研究職公務員であったが、タイ郊外にあるアジア大学（オーストラリア政府が主体になり、日本政府も負担してきた大学）の近くに日本の工業団地を建設し、タイの企業と日本企業が出資し合い（出資比率はタイ企業50.2%、日本企業49.8%）、7年間、毎年タイ企業の出資比率を徐々に高めていき、7年後は完全にタイ企業化するという日本政府の対外経済援助政策を推進するために企業の専門官として身分を大阪府職員から当時の通産省に移し（出向）続いて通産省から外務省に出向するといった面倒な手続きを経たおかげで、タイ入国時は外務省の外交官ということで、パスポートも政府外務省職員の期限付き公用パスポートを持っていた。

初めて持った外務省の公用パスポートは極めて便利のいいパスポートで、外装の色も一般のパスポートとは異なり、このパスポートのおかげで日本から出国する際も、今までパスポートチェックのために時間を費やしたが、その必要もなく、別の入り口から空港内に入り、またタイ入国時もタイ政府職員が同行してくれ、何のチェックもなく、別の入り口から入国できた。

さて、ラーマ9世（一般的にはプミボン国王）は、若い頃、スイスのローザンヌ大学で学業を修められたが、1945年第2次世界大戦後一旦帰国しすぐまたスイスに戻られた。しかし、翌年の1946年兄のラーマ8世

が急死されたのを機会に帰国し、タイ国王に即位された。夫人は有名なシリキット王妃で、フランス滞在中に知り合い、1950年に結婚された。シリキット王妃は国王とは従妹で旧知の仲であった。我々は国王のお名前をプミポン国王と簡単に呼称しているが、タイ国民にはほとんど通じず、プーミボンアドンラヤデートと言う呼称は不可分のように、プミポン国王と呼ばしていただくのは、タイ国民には通用しない意味を持たない言い方なのである。

さて、国王との会見はタイ国の大臣から、我々の任務を簡単に説明されることから始まったが、国王は特に表情を変えられることなく、じっとお聞きになり、最後に私たちに「タイ国のためによろしく願います」と言った簡単なメッセージを述べられた。

会見は10分間ということであったので国王と多くをお話することはできなかったが、当時開発途上国であったタイは「東方政策」に従い「日本に習い、日本を追い越せ」のスローガンの下に、日本からの企業誘致を積極的化し、雇用の拡大と技術移転を模索したが、日本に従属する国家になることを嫌い、あらゆる計画は7年間で終了し、技術移転の後、日本企業は撤退する、あるいはタイ企業の出資比率を50%以上にし、日本企業の

主導権をタイのパートナー企業に移転することが条件付けられていた。タイに進出した日本企業は、7年間で出資を回収し、若干でも利益を上げないとタイに進出した意味がなくなるわけで、安い労働力をフルに利用し、日本の競争企業よりも安い製品をタイで生産し、日本に輸出する方法をとった。タイ、日本の両政府は、7年間利益に対する法人税を免除し、このような企業を優遇した。

このような日本優位の政治・経済的背景は、国王も十分認識されていたとはいえ、国王としての威厳とは関係なく、タイは政治的には立憲君主制の共和国ではあるが、長いタイ王政の権威は決して損なわれることはなく、今まで内乱や武装蜂起や軍事政権時代など多くの政治的混乱があったが、国王に対し反抗する勢力はなく、最後は国王が両者を宮殿に呼び、膝まずく両者に和解を示し、全ての政治的対立も、国王の一言で沈静化し、終結した。

タイは、年中極暑であり、国王はバンコックの宮殿におられることは少なく、多くはタイ北方の宮殿におられるようであるが、今まで、時には不安定な国家の時代もあったが、「仏教」と国色の「黄色」と「国王」が存在する限りタイは安定した国家だといえる。